



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

〈第七号〉

春分

三月二十一日



## 塩土老翁の卒業

春らんまんの弥生三月がどこかもの悲しいのは、卒業式があるからでしょう。母校を去る惜しみ、友と離れる寂しき、また新たな社会へ出る不安などが交錯する季節です。

この春、伊勢神宮の御塩作りを六十七年続けてきた吉居清雄さんが引退されました。昭和七年、二十四歳で奉仕して以来、神宮の御塩を守り続けてきた吉居さんは九十歳。その風貌は、製塩の神といわれる「塩土老翁」と呼ぶにふさわしいものでした。神さまに奉げる御塩は、塩作りの最後に三角錐の形に焼き固められるため「堅塩」といいますが、この堅塩は三月と十月に焼き固められ、一日に二十個ずつ、一年で二百個作られます。遷宮時にはさらに二十個多く焼きます。

「これまでに焼いた御塩は一万三千二百六十個になりますか。自らの手のひらを使った御塩を神さまに奉げられて、ありがたいことです。遷宮を三回経験しました。長生きをするものですな」

吉居さんは「御塩固め」の前日、塩焼きをバトントンタッチする喜多井紀忠さんにつきつきりて塩作りを伝授しました。吉居さんの時には、前任者が急病で亡くなったため、引継ぎがままならず苦勞を重ねた経緯があります。「引き継ぐことは難しいですな」と言いつつも、今回は自分がまだ健勝のうちに引き継げたことに安堵されたようです。

二十一年一度の式年遷宮は、技の継承でもあります。神さまの塩作りも世代交代がなされ、海水から作る御塩は受け継がれていきます。御塩殿から塩を焼く白煙が立ち昇り、波音響く空に消えていきました。

文 千種清美